



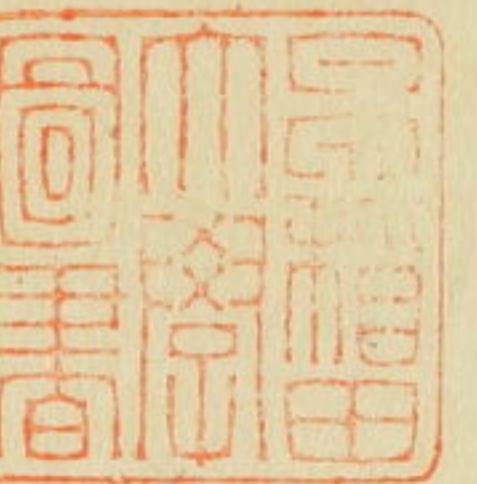
官刻孝義錄

卷冊三

篋前上

口 g
1596
43

9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9



孝義錄卷之四十三

168年19

○孝行者前國上

○孝特者

松年兄弟同領分
糟豆於上中原

○孝行者

同領
宋像於田隈村

○孝特者

同領
遠賀郡野間村

○孝特者

同領
遠賀郡黑山村

○忠義者

同領

孝行者

鞍牛忍四年九村
同領

廣益

三郎右馬

元祿九年
廢矣

孝行者

志摩忍家原高
同領

百姓

正七

四十歲
廢矣

孝行者

糟屋忍家原高
同領

百姓

九郎左馬

元祿十一年
廢矣

孝行者

鞍牛忍水原村
同領

百姓

孫四郎

元祿十一年
廢矣

孝行者

鞍牛忍中条村
同領

百姓

平次郎

二十九歲
同時
廢矣

孝行者

鞍牛忍內住村
同領

百姓

休白

三十歲
同時
廢矣

孝行者

鞍牛忍上新入村
同領

百姓

休白孫百姓

三十歲
同時
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

又次郎

死後
元祿十六年
廢矣

孝行者

鞍牛忍名子村
同姓

百姓

正助

享保二年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

六助

三十七
享保三年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

又次郎

死後
元祿十六年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

金七

享保三年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

正助

享保二年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

三七

享保三年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

又次郎

死後
元祿十六年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

正助

享保二年
廢矣

孝行者

鞍牛忍木下村
同領

百姓

三七

享保三年
廢矣

孝行者

同領
鞍手郡木曾瀬石

○孝行者

同領
穂波郡九郎丸村

孝行者

同領
福岡城下上名崎町

○孝行者

同領
遠賀郡内浦村

○孝特者

同領
遠賀郡本高村

孝行者

同領
宗像郡武充村

孝行者

同領
怡土郡王丸村

孝行者

同領
福岡城下村木町

○孝行者

同領
糟屋郡若松村

孝行者

同領
博多堅町

○孝特者

同領
鞍手郡植木村

孝行者

同領
郡町郡下磐固村

○孝行者

同領
志摩郡大根島

孝行者

同領
博多桶原町

孝行者

同領
福岡城下唐人町

孝行者

同領
福岡城下栗院町

孝行者

同領
博多桶原町

孝行者

同領
福岡城下唐人町

孝行者

同領
福岡城下栗院町

清一元文五年

慶美

備三次元文五年

慶美

町人山鹿七郎元文五年

慶美

助六延享四年

慶美

發作寶曆二年

慶美

次七寶曆十二年

慶美

若七寶曆二年

慶美

又四廊明和二年

慶美

甚五明和四年

慶美

與吉明和四年

慶美

发七明和四年

慶美

元助安永之年

慶美

发次郎安永四年

慶美

金剛院安永五年

慶美

若右馬安永五年

慶美

兵次安永五年

慶美

町人日雇娘

雨衣湯

安永六年
褒美

孝行者

同領 福岡城下湊町
同領 那珂郡樂院村

盲人

歌仙

安永七年
褒美

忠義者

同領 同領 博多祇園町
同領 那珂郡樂院村

町人吉兵衛
町人吉兵衛

仁助

安永七年
褒美

孝行者

同領 同領 博多祇園町
同領 博多祇園町

町人日雇娘

源七

天明元年
褒美

孝行者

同領 同領 博多祇園町
同領 博多祇園町

町人日雇娘

綱林

天明二年
褒美

孝行者

同領 同領 博多祇園町
同領 那珂郡春吉村辛町

百姓家屋後家
町人小山辰仙屋下男

五十九歲

源七

天明元年
褒美

孝行者

同領 同領 博多祇園町
同領 宗像郡土穴村

町人日雇娘

二十四歲

又助

天明二年
褒美

忠義者

同領 同領 博多祇園町
同領 那珂郡春吉村辛町

町人日雇娘

五十二歲

源七

天明元年
褒美

孝行者

同領 同領 博多祇園町
同領 那珂郡春吉村辛町

町人日雇娘

五十九歲

又助

天明二年
褒美

孝行者

同領 同領 博多祇園町
同領 那珂郡春吉村辛町

町人日雇娘

五十九歲

又助

天明二年
褒美

農業小穀

同領 嘉麻郡鹿毛馬村

百姓

五十九歲

又助

天明二年
褒美

孝行者

同領 博多祇園町

町人吉市郎

五十九歲

又助

天明二年
褒美

孝行者

同領 博多祇園町

町人吉市郎

五十九歲

又助

天明二年
褒美

孝行者

同領 福岡城下樂院安守橋

百姓

五十九歲

又助

天明二年
褒美

孝行者

同領 福岡城下樂院安守橋

町人吉市郎

五十九歲

又助

天明二年
褒美

孝行者

同領 福岡城下湊町波戸塙

町人松石市三津

萬 古

天明六年
褒美夫

孝行者

同領 福岡城下湊町

町人糸袋金

玄代次

天明六年
褒美夫

孝行者

同領 博多主君町

告

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 博多須磨町

町人糸袋金

全 痞

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 家像郡本木村

百姓

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 上座郡星九村

百姓

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 志摩郡名田浦

百姓

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 福岡城下材木町

町人糸袋金

仁 次

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 福岡城下大工町

町人糸袋金

法 助

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 博多演小路町

町人糸袋金

法 太郎

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 上座郡吉野村

百姓

仁 七

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 志摩郡船越浦

町人糸袋金

猪右衛門

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 茅麻郡大隈町

高人傳集

仁

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 同領

仁

天明七年
褒美夫

孝行者

同領 同領

大 一

天明七年
褒美夫

孝子傳卷四十三

六

四十七歲

同時

褒美夫

無田貞女利有烏娘

子 宽政二年
寢矣

孝行者 同領
糟屋忍松原村

大工

魚次郎 宽政二年
寢矣

孝行者 同領
志摩忍田尻村

百姓

用作 宽政二年
寢矣

貞女者 同領
遠賀忍佐左座村

庄屋

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宜者 同領
宗像忍宮山村

組改

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宜者 同領
同所

組改

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宜者 同領
同所

組改

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宜者 同領
同所

組改

百姓 宽政二年
寢矣

孝行者 同領
遠賀忍岩倉津

組改

百姓 宽政二年
寢矣

忠義者 同領
宗像忍赤間高

組改

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宜者 同領
早瀬忍脇山村

組改

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宜者 同領
同所

組改

百姓 宽政二年
寢矣

風俗宣者

同領
同所

風俗宣者

同領
同所

奇特者

同領
遠賀郡瀬津村

奇特者

同領
同所

奇特者

同領
同所

農業籍

同領
同所

風俗宣者

同領
遠賀郡糸村

風俗宣者

同領
同所

孝行者

同領
同所

農業籍

黑田田叟高領分
在原郡牛本村

孝行者

同領
秋月城下上町

孝行者

同領
東麻郡平山村

奇特者

同領
同所

孝行者

同領
同所

名不加

歲不知
慶美

六之郎

歲不知
慶美

德友

歲不知
慶美

惠五郎

享保七年
慶美

松源郎

享保六年
慶美

助七

寛政四年
慶美

忠佐

同時
慶美

忠宣

同時
慶美

可卒守久人

同時
慶美

与助

同時
慶美

信助

同時
慶美

長七

同時
慶美

信助

同時
慶美

二百二人

同時
慶美

次多滿

同時
慶美

与十郎

同時
慶美

孫右衛門

同時
慶美

忠百羅里安

同時
慶美

二百五十六

同時
慶美

孫右衛門

同時
慶美

乙人

明和八年
寝若

町人本多市妻

发次郎

五十九岁
安永二年

百姓

孙四郎

岁不知
安永三年

百姓

孙四郎

岁不知
安永三年

町人

孙三郎

岁不知
安永八年

町人

孙三郎

岁不知
安永八年

町人

孙五郎

岁不知
安永八年

孝行者

同領
秋月城下今小路町

町人鬱信

利義
寛政二年
麥名

○孝行者

同領
秋月城下今小路町

町人

佐五郎
寛政二年
歲不知
麥名

守持者彦一

彦一は家臣忍田隈村の百姓あり父のせにありく
とじんぐうり糸を信うけし事ありてかくと糸
きたすりあくてさかくもろかとに病くうせぬ
その二年後彦一はよごしくてやる事ありとも
あらまくへり生長のほよくとまく及ひて久し
くともくとまく事と悔かずと人へて糸のまに
いそせくじむく父の糸へこにせありてそこ乃
まうりけついつよひと事なくとうせぬまく
ぬぬるとひやあく年月うる事とどもをき

たまへりてうやうやしく食ひ下されたり
らもとくわき、父のうりを年よりれ利
きとくに業と利限をへえむ往にうすとくに活
きとくひやうけるまほも差へるに感
て源くらうひくひとの困窮をうそよ思は
してゆくあらう業もととくうれを
きむふまよあくされ、うそくともうけと
へく事からひもくうけひくに
あらうひくひく後、衣冠長百姓あとあく
ひくことえられと事あくうへくに余るく

領主に消へ去るゝは二人ともにひしもひあく 漂々として
ありと称。美ノシニ差へよハ父の儀うけ。余のり
もとにて年乃利とくもへくやくとへく系の主ひ
すまほは是とおきむへくと裁判へけもひづるよ
く云葉あくまで事よとこぬ是天和のちくめ
内とあり

こやハ宗像君地ニ遙ニモあるやも免免アリ父ハ九郎
右馬トクニ又あくまつてき者あり一久ニヤハ九歳
の時里うち某へ後に身をうり奉公に生トニ生長

の後も社にのまくまでのことをあらわせんと主人のいふじよせく年季ともぬせうし
がとくに十七年と諱く二十歳のうすれいあ
つてかひきうへうをつまうともあくはまは
うての年法を定めぬとえのうまけともあら
じゆく年月を送り年月を送り年月を送り
をうけくやうくよんどおり今まで儀なまを
うがお直なりさうが十日儀乃身の代業とつの
ぬへくそくの頃ひるがすとひうれど

こやハ種流とひふねにある人のあくときハ未干儀
とのへありがるお儀ハ種るくまくよぐんがと主
人おここくへ、女のうきよくむくる身のへうと
ぞこにとのへ車せ帝船がりとくはくとく
里のへくも主へなりひたててだくとあくひ
されはつゆのほんを云葉かくおう葉とばゆうえ
とくやくく候とくせうかくじくもこやへの
種流乃葉をくとくとくなけりハ六年前の
をふにあく十三儀の末とゆううけし、そのひと
人よもぐれく長と年月をうひとま

之に至りては、祖に主人もそのあつての年
幼少の頃よりの代より、二歳やうすに後
づれして、さうけやまじて、まづのふとばれとばれ
は、山羊のくそ地をもとめ、とくもとえく
くもとくへ、度にあらげしく、父と母のまわり
と称すよまくに、年のうちにより、かくほどの
貯とこうしむしもあきはく、かね不ひがくろり
夜をうなごして、やくくそ地をあくびひく
きく母のもやくなくからで父の娘よりかく
たのじへき者もあり、こやひ其後をもとや

めくぬくねすちやうじうぐに父八千にあまう
ておひをきぬき、一斤附も側をうるきくわくく
うとおまよのと居て、お夕方まうけもとあまう
たまくハ或ハ海邊に出で、海藻をくうふにまくと
薬をうく又ハ島をうらぎをくえある附をく
やどんをととく、文のねとまくひゆうとおま
ト福の道橋のあやうさね、背あひつまと舞
く舞ひ生のくを慰免けり、父の病み、うり
りおもんのまくからくうく、お老をうりての
病をつるよきと外おぬせうく、それより

こやへ遠きにゆれば山も海もして近きにゆゑ新
と二アリ破案を擱ふとしてそのへる事といそをき
けり父のまゝうじの消渴といへる病よりは空腹に
食と二ア車十二三度湯水とのじ車三四十度
に及べてあけ言たえく称すりぬきりしと云
ハ左のまゝ夜食ともりすきて側を離れまば
飲食ととめりく行脚も飢渴のまゝに及ばせ
は暑て財の枕とあつて涼しくまづく覺えき
はとハ首の下夜とも父よハ首筋をとおさへ詰
ひどくとゆきひがくと接さむくとあ

トヨリあかくとて今抱せりうやまにくくて父よ
つゝへへ事よそに十年にあより一いや三度こ
あふく病よつて日暮乃考盡りよもえありし
うハある時父のこやにじひひふくと親を棄ふ
ハ世のまゝよしてさとあへんから棄てど
りひとよ女の弟をゆく我老を痛むことゆ
それ奉り乃原くせらあゝ事あよめゆく教ひあ
るへくほけみもけ地の安神乃その志と感し
はよううりて我をあくれずせりよや年も経つ
年とあくせ涙を流して泣ひし夜よふをも涙

人まへいつきも神をわざとそむけともえ
い病まうてつるよ負害ニ年れまじかくま
黒のこやうふりがくうけさめゆくに西光もと
いるまは僧をみく神もろ法事とこうをこま
りあ一周忌又ハニ年忌といつるにも僧とおなた
ておよきとくは僧事とて月とみ忌日
よハ齋料とくまわづひハ栗ふとと西光もに幣
しの僧も彼の家大富とあはせくあとちしき
毎うせとくはくじくめぐんとくうふ事と用あり
某うひうのも蒸湯をひとくむとくをとりひきえ

けきともこれハ父もむじるみこをあれは僧のより
もうりしてハあくじふとくつゝく月とみどくらひ
ゑらは墓にも一墓乃石塔とそよびつけり
る事、まことやう至和の無くてなうかせきとあ
るの辛苦といとくつう友よえやうりんくも情
えをかとあらせ石の浦奉行をといふ者も彼の
りのりつれ事とす及びくかとそへくよう
身に及くさう孝りともとまくうこやひまく
小四十歳よりおそれとくばやもお住ゆることに
まくまくとくとくひきつーかはよまとまく

あ持を嫁とへしると媒もろ者もあらずも
妻若くらひうらうる妻のとたうほん人の徒
うへうひのうのうまのじも自分からうきて父の墓
まうともんのまにうへゆくらんハ本意節
まとうけゆううりへ祖は後の媒もろ人もきこ
ううそ船舟乃福ハ包船舟往來に楫とくじう不
されこやか孝り名化まのもことくすやと
まく族人の為称ありし事も多きう元
福二年とよに不乃毎指すく消へ玉名れハ領主
もぬく感称して寢先を立させふとぞ

のへくよもあられと歎うかとゆ詰もく

寺特者九郎左衛門

九郎左衛門ハ柏屋敷尾仲村乃百姓左郎左衛門^{うゑの}
いとけあると財博多の島あ紀年者北喜子ら
里くの養父世をあうせうへ実父のぬよくうけ
きと田畠もくもくぬよくうへに往來していざ
らぬくとく離島にんと至せうへ祖はよしむひ
まやくにゆううへか躬夕の食事ハ雜穀
をのと用あく筆はくうりと衣服も年く裡へ

まへかよのきへ廻ふもくあらざるとの
あらひある秋冬のうよりうりて廻ふと
里に夜うよき者あれ新あらどやあら
甚夜のありはよきとのまち方にあらつては瀬
あらまくまく来年のみうきくると小糸を
へくにそのもきをとくせ產業のえくと
人をみたるは余本の村ともまくわくと
はくへんへんと力ある者のつこのいおうむりはう
けりまくは乃常民よかとあきよひ見とも
まく施しけり越室二年とりよしゆす四年

やうりへくは板三十俵を出して村乃うち或は隣
村の飢人を救ひ至後の凶年も娘一貫五百目と
米五十俵とて施しけれ道に五穀の施こゝに
うちとうとうよ流とえ泥とくづくともむろ
いあつても食ようらせ漆もとえの時ハ乾ふと
とく或はまく一板かとくは多の選擇ちふ皆
付養父の墓系ゆきとくは多の選擇ちふ皆
しにれぬ寺に作ゆるのとくかと用度まく
もくといまくとくのハさう本のとくとく
其料をまくとくやうねうら寺時のとくま

あああああと人のいひ傍んとをひといと名
をつうて友そくめの誰とある人すうじが姓
ハをのつら九郎左衛門もととそいい傳へける
年若き者とくまとよはいのものりいを貸
外すて必とくひよ急うすくひととのう
年ころれ稼穡乃翁雅乃事をとゆめやうる
里やまにほりし人その孫んぬるに感
けよや風うくに彼うけいようつりんぐく
僕約をつあきハ村うも彼くそえ
一章紀説ふの多禮によさうて父母と農父母

とお實徳といのうんやこめふああとせうを施
くて日牌といふを立すと一族内為のものとく
月牌といふをも立すとく父と農父との債多
ううううううううと其金の主をといひあひてのこ
里あるくやくくらうくゆうく伊勢地ち井み
宮せう車もくかその官居とちうむ者よそくそ
くれ銀をあくくちうむ林樂といふ事とどま
せ末法の林くよもあすこのはかりとてとあく
久れ九郎左衛門ハ八十四歳すとて元禄十四年と
これをうとせくか生涯をとやうすく日々に

數里の道を走りとせを以てく藥やうのあと
用ゐて草あつ毛まはるやかうおとちうは
若きもの食をねまうと身をほしにせき
まへぬうびの領主よすえけいひ毛う
四年はううまじは寝室をしゆげ地のま
を隅田□給地をひ日一もとく北辰庵を
もとめ即ち村の百姓をうひつゝ酒食とあこへ
く渡た郎左衛門の寝室とく裡そこそくとく
せし村人よもいわきも彼うりひを鏡よせよかうい
まくしてそくしけつた郎左衛門のうる道を

まへき者をうてふ心立とまうてうちれ陽和正
けあへてしめおにくらひかひよハモア物もの
うらうりくうふをも彼う教よ咸くうつづく
風俗とよいうやうこくまく宿の令をく
れとくとくと死してのほ一毫の系と縁とくを残
まへまへ

奇特者孫に郎

奇特者同姓

孫に郎ハ鞍馬郡水原村の百姓あり生質貞實にて
年貞徳役をつゝと勤め又老くる毎につく

て孝りうりと金ハ自く忍の服田村より嫁せり歸
のみうちか母子ともに離あせらるゝと母ハ宗
儀院の下木村よつてひよりせしゝられと、家
ふくらめすと、かど孫田郎ハあやしくに衰くは、
娘の教育も遂う一ことはうよ是とも又木村乃
仁某りあよを云せさせ甚方乃代をゆくとの
きうも見じひ入助けといふぬるるに娘乃
東幼とつて時おりしがと孫田郎へうきすの代
とつてのよゑにかるけまハ婦の走うけんじて
そ嫁せりめけりて帰ハセとあらし金ハえ様

五年離あせらるゝと木田村乃仍くに一年約
のまことつてあをあくろ十年よひころも木田村
乃よ少どりの者よつてあをせうひ年田畠との
ちよくと貢もとたまうくる者多くし
に孫田郎が未をも木田儀あうけまハ本村の畠
と木田村の年田郎といづようりてつてのひう
やう姓之人ふたとひく年貢をとく納役人よ
翁ひひけらハ叔父孫田郎貢もとあくあゆき
うひつるよ島とうしてつてのひともとひうだ
ハぬ島なとはあれ我まとうりその者の

代をひき納めおりうとへしナ月十五日既おもれ
ゆきりとせうすらんとひしきとハ役人も松子
あらんとせうて故孫宣郎と姫とを呼んで事
の子細を尋ねるに孫宣郎はさいつて爲被を貸
もを云にせせしにさうけの時五うしゆと其方
の代をうきにあふろカかく彼の母の娘内史うりつ
くみのか、旦、人すもすみくせけると種々離縁
よほどのそれハ微小面自うじ事なう、離が
乃後も又まふせまくる、主陪金をうそくにせと
わう某の死にうれハ年を買まうて農業

のううううううう事かことううううううう
けよくこかうせよううううううう、今ハ某家へ方と
賣めとも彼の方とひらせうてこりし多くに
金ハ年は思あつて、叔父されハ比祖即そくよあう
くれ車とはうれひつきとえひくとあもと
えにされとも初かよくて父母よしるを連絡さ
素音とうけられハ親のものとすらぬ種ま我身
とうせきつてとうてみると孫宣郎のう
へよう海つて社主とうるんとあふともうれ続人
み立てるうへまくそろ車がきよすとりよに

は月の玄葉とてゐよとらむひの葉とて
事あらそじよのも島賣車をやめくとあへ
かどきのうそあらそひしに其度あるあふ
村のうらの人々も彼お志のほとに感しに
きつて居たりやうく役人の年貢を
ちや島を買ふく平次郎よりおこむりう
消へてけよハ強とておとうらしめある方
の代を以くみ島とうけくとくしなと裁判
し氣れ、平次郎も彼お志と思ひとくとそ
あす孫四郎、島とうくし價がよ里あうさ

とてゐよとせにつのよへとく姫の志とをを
んとせり、びりく領主にりきせきて因大年
正月の車よりし、孫四郎平次郎と庄屋と
百姓を福岡の城に呼びし先孫四郎が姫を寝
失して果そとくとくせいつきも嫁嫁乃車
をうひもううり経年の安堵とまくじむへと
めはくううり孫四郎の姫のうりふうと農商
ひと寝ひそく年貢の未をとゆく平次郎
にと彼お義理あると感して島の價をうけ

さうの事すと嘗てよく神とまざるそくへける

孝行者体白

陰陽師体白ハキヤ好中京村人あり父の名
をつたとひのうめの名ハ父もともにかたまどを
りひけり一彦うらうひよそくとすらとく名も
くは自もまたその業とうけつまく國中の人に
よ伝せらるきこ体白生優駕實にして父一彦
につくと云奉也うそく領主の初稿西にこも
し時ニ被ニ自らうれむうへりかへ父のせ
とをよるあらゆくゆされ側にあらじまくとも

ちよろく車をくわしく書をうり巻につけ
あく嬰みの親をあくふくやく衆もまく父の
寢不とうやひつとひ枕をまくいも枕とそ
の床とあふ時ハ熟に床ふとくの枕をきる時
ハ必ずに床敷とうやひて無ふかゑること
やうしからぬもあく彼をひととぞして甚ふ地
を詠ううのうり体白乗若ううり父の心とよ
ろこくじる車とそのまうう乗とくとく宿ふう
そめよもそのうよたうひし車か賣トと業
とそれと耕作ともいふとくに或日陰村の人

をとやといひ集て田植の第にまぐれしとせしと
をとらうほしも父の豊前乃小倉にまことせんとま
せくよハ田植ととくされハ海幸彦代ととめ
里てのまにそくふへしえうり小倉まくいり
う里の名せうなるかすくて改次もたゞかすて
山坂乃うきへかけきハ必有乃とく我は隨ひまち
へうほといひけくの体白ハ父ひうち行ん車
のくもとまくゆきふうわあくされハゆる
傍いすくさんといひ父のくにそくありとく
つるやといひし人をくつとほ父にまくい

おへとうそおの儀父病にまこと七十七日すくてう
ぢゆくややうらうらハとよ氣を日にうしてみ抱
ととみ花しての後も衰減でとまることある
にとくとく体白ハ森氏ひくくわ残よ成あく
かとりひて名のうさうしやくよ只中原乃体白
とのそそ骨へける人のその奉行とよとふも残
が奉ふにあらはせとりつへくかつくとのまろ行ひ
とくうほその人よなうううしもよくば額
ひかくと年七十とよしてせをまぬえ様元事
のとくううう体白かふと名残とりふまくう

あひと業うて國の陰陽師の長ありし後は
ハ年ふい病多々定生村のまゐる月下夜の
にその長をめぼりて更ト其業とやめ、唯耕作
の稼とのそつとめたり者隣りみ二人あり是を
熱てといへり父につり農業を勤めり、す乃
通じことづれに医歎へかづりとうげくゆく陰陽
師の長とすめぞり体自うりお傍へくち隣もゆ
こ考みうりしりきうりくばめつて考りとを
せり筆すとにもくわへうりき、彼もあく父母と
既ううじるをゆくせう樂らるをうぬゆる事

とまじむるのも六親よびもまことに御しと乃達
ハト教とともに、麻食とうひ神も身の安樂と
もももうりともとくうり書讀事とゆき耕作
のゆきあきハ年に巻とくもは悉とくやあひ
は恩をうきむとく貞節を納ると年とく老
にまくまく親戚の除びゆくへト教にあひ
とゆく村うられんの對して禮義あうくは
称よ農業に力と用うる事と家の教でとせうか
ハ唯その村の人のみくは隣村の老にとくある
其志乃私うきて威しき風俗とくよまく

もとをせうへ領主にすえけむ、農人のつゝこと
もうもとへじ老なりかこと嘗祠をくえ縁ナ年
の松被うどある中原の躬田とて後とうせばく
養ひたてあ活人のも厚く教門せよふじゆ活
ありとて

貞義者源六後歿

遠賀郡本守村の百姓源六り妻ハ元禄ナ六年の冬
年暮くしてやもめとなり男子二人をうめらか
兄ハ十一歳弟ハ九歳二年たつきに因る船尾浜村に
まわる父甚九郎といふもれその娘娘をさし

頑じてどのまゝ帰ふともあまくこうちつをあう
てからうへばとく後支をじくともに稚きもの
と教育する所うけきと年このひうれとあ
支にまとまる事と能くうけひまうへが父母の
んをやうんへあくはふらも教育のこめられ
ひうのものはことにあくひこすくみ生長を
もくやが、彼も力をもじてうけふやうにも
てすげきへやく目し村の友次郎といふ者
乃家よつて居し者之郎といふとひつてんと

さへせんじくやうひうん十二月十一日乃
タの縊く死へぬ領主との貞義を感嘆し
てふとも兄弟に慕そらしくとめしく當財
まちのをもけ田島の村人のつづりと
て年貢のあおりと辛くはるゝと彼おへ
生長れ後田島つゝかうへへあよへまく
沙汰へき

奉行者正助

正助の宗像郡武丸村の産あり父山ふじ郎とい
ア多寫すと田島をくよと先地もむけ

きほ人の家を傷いさうれ高ひをしてせ代後
里子二人あり兄が正助として妹が同じ村の
組合の仁右衛門妻ともまく正助人の下駄と
なりて父をやへるいへこの結果をどう
にせとおをつよやうよしてそくくへきへ
かへとくたれと来て家を下るを正之郎と
任せられ母も人のつづらるかよのつまぶ
ぬきのゆくとくよくよくよやうかわがまな
らと支のやうる時へくるところの孫へと孫にあ
そゑひうれ正助もゆくおをひくことまく

小人をさうへてある財と山體をもつて父
をやさかよそひうとなくけらか二十歳あまり
にして母法ともにまふせやあやく田池二位
もとの買あどりと舞作へるうら城東へ
けきと親のねりおハ獨へほめひとつて買
し又下小酒をねらか日下不とうつて買
おとす程よ酒屋のあらえをその者よりや威く
えん價えの車あれい今より酒のよきはく
あくよみ一はとに光輝をおあるゆくとつよ勧
がよふとくけあへとれひおづくらへ

都へひえぬよへゆつてまうううのくもと
めけつかの酒家のあるへいその後正助があらうる
もとといぬへくらひつにむすくわあいへ
ハ何んくくくくく我家よへ來らまやあくとくひくろ
とくくくひかしてまうれへくつるのそなまよる
やつううう西助お小舟のうぐりへくハ物こと
に二町あたりあるまぐれ川水よまあひはくと
神仏と達板をくへてあくとくもくつて父母の手
あくよ湯をさうへ日くへ舞作へるることよ
もえの辺にあくとくとくとくふ車支を

まつさりしやが武財女のもとへかるむだうちへさあら
うべしをされす、此れ湯をくのへまうんせ
みゆく年月とあふへううどりひしに作つた
る事かく、女人のものへきふ湯ともくきども
りん車へとそれ多くいふもやうへきくこと
うりけは正助つてに清きみかとのうへとねま
まく、余不づくねうふ時ハニシトモくもううき
とえくもううきとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

りひきりそくく小百姓ハ親に云葉うりともせ種す
とと疎暗うるものあきとあくとうじる者もなれ
に正助ハ父母と称するにうううく様とくとく
る事かく、そのうううのうやくへとも又ものゝお
親につふろくとく外うりのうちにあのこともう
腰うらめくとく入まきう人のうのうう説とくとく
にく様へうきの親うきがそれうりかに腰を
ううじる者あくとくとくひきの家に修理とく
ちぬる附あくとくとく父母のおととくとくとく
八金称よのほうにうううほんをやとひてゆせう

ある無声と注いで車あり母れいもすき六泣
そこらひうるにあやめりて父の杖を踏してこそひ
けむまよさうよ二親のいふあらそふ事あまが筋
ハその間まよひありまよとあらせ涙をうる
てほきを見取とりひまくかくらうすまへつる
父安もれりんよ感しいうと祥て笑ひまほは
へその公役よどててまほ年との貢ねをもへうる
先の納免つあまうあきがまほ父に酒貢てほ
め父ハ六十歳にして中風乃病にまくくわゆ
よくふと用ゐらうほの事に力をつゝて其若

ふ地にまよひて舞辭化にやるふうきあらうきと
朝夕乃食事ひうら潤してくをせうりにも
その勤めとく事あくえりりあらふと称も
廁よゆくにもあひり娘のもとにもうりくやん
こづにあ六町の石をぬきあせが帰ること
すも財をたぐとしげよりてあひくうと
ある財財のもとよくあせうりに涙を流せし車
まよ妹あやくまよひれいふが父を背お
ふる娘乃名うりもふやもそれいふとまの裏す
ひとくくくあきよやとひいとええほ

済内にほきへこそひうち妹もあへたれり
ひよるもひて奉りのふよやうの家に
嫁せしめと月とよいさかの酒肴かとあまう
て父おと歎えらう正助へ親をもへうや
まよのこよひてれをあひへの及ぬとこう
にあらはうとどうやまひんをあられとま
ふしてゆにも偽りとをいとも人の吉凶を
まくとよとの事へとくがひきまことに
方をひとにんのとあとまうり或ひ公役よび
らう者のみさうゆこと事のあるが又はその房

若といひ公役をまねきとまうとこれハ秀の
の田地をうけ耕し諸役をつとむる百姓アオ
ムスコニキ事ありとく至るをまうほんよ
リて出つてあく寝のほにと波ホモ正助アリ
エにまちりてその勤に鳥うさりうへと身
瘦痩の病流りして村中の人々甚病にう
里しのうれんうつりそすんとと懲きくの
病氣にい出づるものもあうしと正助ハかく
もじよゑあくあくそれその前に往來して病
用とたまけ孤獨のものあきはうら醫者アモ

とよきひつ業と謂し糧とはいふ者あれ
まといへりて死むる者あきハ葬送の事とい
ふかと歿りぬ或喪に助ひあらり二里あまり重
たちては池田村とのふに住る盲人のありてや
うりけりがおもては序に無からずノ前より
ふるもえ石とりよもろとこうとうけまゝせ我村
より、福をくみよゝる同志のまよよまう
をくわどりひまこづくしに西助ハレとやまとせ
西助あくまのてぬせんとこうくまう
くと父ハ生の爲に事あけさ西助の約束

ととけううんことりよううしう或業のいとまあ
る時ふのわうてのもえ石とくらりめぐりゆく
父のこゝらぬうこ業と便ひて盲人のもよよまち
行なはせに門邊にあつてあらう者のあるじ
きくえを事あく或業とあひふくうへ
るのくえに食にりあひうその業とよくつこと
ぬせり西助ハラムとくらむくらむる事
とくらむくらむくらむくらむくらむる事
ありて你とくとくに撫たゞまくけくらむ
ぬきて正助ハ弟と代てよまの山神をあく

年もとほよのものとあらうよ、とくまの田を
もよじあそび、とあるとあそびとくま其骨れと
称えひきり年貢やうれきみと松つまゆいふ
ときの誰しもその馬にのってうるどく、と助
い蓑笠ふとのうさねともにまとうとくらあ
ゆうねなつきのへくわばく馬にのらうや
といひしにうちあるた事とりひきよふくとく
もるくわぬに重荷とせうへるこじもえり
くせのとくも誰かくわくうけづんきいもむ
まくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

りくわくわくわくわくもその云葉に服へきくひて
アカルのうううううう森兩耳懸のれうへ
まもとうきへふげくに西助はうと氣象もあん
いまくとのまく、稼穡はとくはは天令にこそ
あくはくく水旱ハ天よりかせら災ありくまくは
ううしる事にあくはとそとくうれ頬玉若
西助はするはくうとゆくとまうはその村役は
まれうれわの心その心の心はくうに出来町りう
と闇ておけよとつづく居うううう村のう
ちれ長くううううに及づと名すとてくより

まふことにうるまに手とすり腰とすりておこそ
まゆるやうい那人を食といてもりまよともいと
あそにせうりくらへうりえいあくろの人く
かうううとそあうあひくほりのれんあ
ひひようつまく村の閑俗もなきうりうり社
奉の財産をしへく女の海軍をきくうりえ
のとこうひの奉をかくさるをへづれそあう
きよとうとくつひとぬとうひくまことまにま
く一ハ正則ハ正義一くあ親のやくまひくよ
もく一くわせんすくよなと稱んじぬ

にりのうと男の家よとりゆひりまき調査も
こくまかひゆくそくへしけりまほまく妻
じくよと母のもくらへくまうけ引のこにと
父毎の老衰へく経年もくみうれい娘をうきを
不孝うとといと妻あへゆくふあうん父每
妻ふとやくまく核稿よじとよおくとのつづ
おめにあうやうんもとそくくとくぬくひ妻
とじくううき父ハ正徳元年と歲のとくうく
とうせうくまく十八年のあひくそのゑ抱に
ふとまざくまくひう後のふも細やく

いとありと多くのその母は毎に使ふる車、いよく
あつて耕作と旅役の外に余處にあらずとあけく
きやくともうにありとそぞくこぬまあくまうり
えぬ車の多く出る附、母の夜食の車うけさる
からよおうけ、毎うり日ごとに父の墓詣せらふ
見ゆねる車、い何それといけり時よりやをこ
ちくやううきこえ、まうくことく母にあくよ
とて菓子くわを賜る車、あき、父のくわに
あくそのまことうらと、母にじくらと後墓に
ありてそぞくげりされと西助うめひもやくよ

きあくまく見ゆうとむ室、承七年的車あく
しゆまの駄車、行ふり菓子こそくとくせ又田
地一段と畠ひりとくとくあくとくと村へこ
そりてあく畠せんにこれうるめくこと蒙る
見ええとにあく先くる父あくよううとくううし
はばくまねい父あくとくううと抱うるからくり室
保二年の暮、終後妻本そくうへはまにこうう
赤写闇に止高の附はやくにあすある車とす
及して西助と呼出し酒をのませ菓子とす
とあくまく母にあくとて残とうせく嘗美

想一といふるをもひくとてまゐるにせんことを頼ひ生
し時おうもあ一う人の下宿とあつて居つたり
と引をりよりそりそらとちくとやあくへそれつ
月の代とつこのせよ助り船ととけきをうり見
子は年、母の齡八十にてあまく助ももやふ
十歳あるく、やうをとこやうてその孝義を
てよもゝ裏へされ、母もまことに我
みのやつよひのをもつてとねりて義を
よう難と経る思ふと、夜食やうのと
り車もすうりへ、今年のまことのり實と

づく酒よへと頃生うりみ洁もくは西助
と福昌の城下に安坐しそれう田堵に於ハ敵の
不とあく年貢をあくそのものひをあく
あく母のまかひんとまくまとそくとま
せく心助はくる天の由ゑうきまく事あ
ら百姓の身のさゝるまく事あくに往につけ
て貢とまくさんとひくまくに移ひひくきへ終
止もよくやむ事とえとまくまくの貢を
おきあくせくうその後西まくとく福昌のまく
ウひまく財主を村もまくうきへよあいへう爲

田比よへりうきくとつものとく実をうれし
うれう喜ぶの天をようくうよやとくすあるもの
うき感へあくりじう西助の村うきの年貢を
納り財主を天に奉うねえきことくことく
莫へじうきとえくひ儀をもふとくくとの
へをこくとあく人めくくいこくめくこく
いよ西助もまく西助くうくひそくよ起出
とれとれの送りに向く村のとくまじと
そもけく心助はまくに云々のもくよゆきとあ
らぬ神よく和中どりいのもあくされん

事なづれ一二日のうちにへづれの某へ儀
うちとよふ店舗もあれば車あれがうこつ
ぬきもあくまど車とくかへりあくへづれの
西助への男の車よがりて困窮のあまうに左
ハジキをうへしてそのまことひうへるよ
さきさんとく車も儀もふともううのへ重ね
詰うへば車とくかへくれよこまくの車
とあそびようへりてうそされ、留ひのやくよ
いじてまく車もあくと空室の車ありをと
てよあくそひのあくそひ西助へりよ

きと車とよさんやあく車とあくそひ
おとそこのあくよあへりうよも車かう
うくよりよらもあくも車のくもは
車金うんとせあくよくうと儀の下よ
りぬきと車とくかへりぬけ車つるよ
店舗にすして男とハ吉と車にまくう西助
ハ我車貢の車もとくのひよと車にまくう西助
も車ぬくへり納うへハ彼もまく車ぬく
うくよあくよれいあくめをあふ
しきりきくへりぬく店舗よまくれへり乃

男の罪もあつてゐるといふ

